

連載 プロマネの現場から 第 138 回 司馬遷の執念・・・報任少卿書

蒼海憲治 (大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

この夏、新疆ウイグル自治区を旅行し、省都のウルムチから 3 時間ほど南東にあるトルファンに行きました。ここには、紀元前から栄えたシルクロードのオアシス都市が散在しています。そのうちの 하나가、高昌故城です。敦煌郊外にあり、西域への入り口にあたる玉門関から、ゴビ砂漠を 13 日間歩くと、トルファンにあるこの高昌故城にたどり着きます。かつて砂漠の中にあった巨大なオアシスも、千年以上の時を経て、いまは一部の堀と建物を遺すのみとなっています。この一面の黄色の世界を見渡しながら思ったのは、司馬遷が『史記』で描いた李陵のことでした。実際には、匈奴討伐に向かった李陵が採った道は、ウイグルよりも東側にある現在の内モンゴル自治区に位置するため、ここに立ち寄ったことはないのですが、この城の外に広がっている黄色く延々と広がるゴビ砂漠を眺めながら、この同じゴビ砂漠を騎馬の支援なく徒歩のみで歩んだ李陵の苦難を想像するのでした。

ところで、中国の赴任の際、司馬遷の書いた『史記』の全集を何冊か持参したものの、その大部な量を前に、なかなか手が出せておらず、積読のままになっています。

しかし、それもそのはず、この『史記』には、司馬遷自身が記した「大史公自序」によると、130 編、52 万 6 千 5 百字が書き綴られているといえます。そして、現代では、読み下し文や注釈なしでは読めないため、この 10 倍余の分量になっているためです。

司馬遷は、紀元前 145 年に生まれた、前漢時代の歴史家です。『史記』の執筆は、42 歳から 56 歳までの 14 年間に及び、しかもそのうち 48 歳から 50 歳にかけての 2 年余は、李陵を弁護した結果、皇帝である武帝の逆鱗に触れ、囚人として獄にいました。

しかも、この当時、紙はまだ発明されておらず、竹簡、木簡を用いて文字を書き記す必要がありました。漢代の竹簡、木簡の長さは一尺 (約 22cm) であり、仮に一片に 20 字ずつ記述したとしても、52 万字で割ると、実に 26000 片に及んだといわれます。もしこの倍以上の草稿を書いていたとすると、その苦労は想像を絶するものがあります。

なぜ司馬遷はそこまでの信念・・・執念を持てたのか？

そのヒントである、なぜ『史記』を書き続けるのかという司馬遷自身の心中が、『報任少卿書』(じんしょうけいに、ほうずるしょ) の中に吐露されています。史記を書き上げる直

前、司馬遷は、友人の任安に宛てて手紙を書いています。それが、名文で名高い『報任少卿書』（*）です。

司馬遷の友人である任安は、中書令という立場にある司馬遷を頼って、自分を有能な人材として推挙してほしいという手紙を送ります。しかし、司馬遷が返事を返さないうちに、任安は、武帝の怒りを買って、死刑を宣告されてしまいます。そのため、この手紙は、獄中にある任安に宛てて書かれた手紙になります。

任安に対して、過日の依頼に対して、応えることができないことを、率直にこう語りはじめます。

「我が身は宮刑によって損なわれて汚れた境遇にあり、何事かをなそうとすればとがめられ、成果を挙げようとしては逆に損害を与えるという始末であります。

ですから、心は鬱々として塞がり、誰に告げることも出来ないのであります。」

「・・・恥辱は、宮刑より大きいものはありません。

この刑罰を被った者が、人並みに扱われないのは、現在だけのことではなく、その由来遠いのであります・・・

普通の人の場合であっても、事において宦者と関与する場合には、気分を損なわない者はありません。」

司馬遷自身、父親の跡を継いで、屈辱を耐え忍びつつ宮廷に赴き中書令となります。

しかしながら、

「私事については、長年にわたって苦勞を重ねて、高官高禄を手に入れ、我が一族の栄光を輝かすこともできませんでした。」

非才の身を振り返って、司馬遷が取った行動は、こうでした。

「賓客たちとの交遊をことわり、家業の一切をすてて、日夜不肖の才を尽くさんことを思い、与えられた職務に一心に務め、天子の親愛を得ようとしておりました。」

しかし、その思いと異なり、そうはならなかった。

そんな中、匈奴討伐に向かった李陵は、騎馬のいないわずか五千の歩兵のみで、匈奴の地に分け入り、数十万の匈奴の大軍を相手にし、数十日にわたって善戦します。この間、みな李陵を誉めそやしたのにもかかわらず、敗北の報とともに李陵が匈奴に投降したことを知った武帝は激怒し、側近たち一同、李陵の批判に転じます。そこで、司馬遷は、これまでの李陵の功績に免じて、敗戦の責を軽減するよう進言するものの、武帝の逆鱗に触れ、死刑を宣告されます。

「私の家は貧しくて、罪を償うだけの財力はなく、友人たちの援助もなく、天子の側近たちも、私のためには一言も弁護してくれる者もおりませんでした。我が身は木石ではありません。独り獄吏を話し相手として、監獄の奥深く幽閉され、一体誰に訴えることができるでしょう。」

李陵が生きて匈奴に投降して以降、李陵の一族は皆殺しとなりました。一方、司馬遷は、死刑を免れる方法として宮刑があるのを知り、宮刑を受けます。

「そして私もまた、宮刑に処せられ、蚕室に身柄を移されて、かさねて天下の笑い者となったのであります。」

「悲しいこと、まったく悲しいことであります。」

「・・・どうして縄目を受ける恥辱の中にすすんで身を沈めるものでありましょか。」

「奴隸や婢女のようなものでさえ、自ら死を選ぶことがあるのです。」

「ましてや私のように、やむにやまれぬ事情がある場合には、自決することは一層容易なことです。」

でも、司馬遷は死を選びませんでした。

「・・・たとえ私が法の裁きによって死刑にされたとしても、それは九牛が一毛を失ったようなもので、おけらや蟻が死んだのと何の違いもないのです。」

「人は誰しも一度は死ぬものでありますが、その死は太山より重く、またある場合には鴻毛よりも軽いとされます。」

「それは、死の用い方が違うからです。」

死ぬことが難しいのではなく、「死の用い方」、死に対処することが難しいといえます。

はたして、司馬遷にとっての「死の用い方」とは何だったのか？

《・・耐え難い気持ちを押しさえ、からくも命を長らえて、汚泥の中に身を墮しても我慢しているのは、私の、心の思いが尽くされることのないまま永遠に私の名が、世にうずもれ、文章が後世に伝えられないのを残念に思うからであります。》

つまり、『史記』を残すという使命感が、宮刑の恥辱に耐え、生きながらえた理由になります。

しかし、このことは、司馬遷は自分自身のことだけではない、といます。

周の文王は、拘留されながら、『周易』を著した。
孔子は、漂泊の旅の中で、『春秋』を著した。
屈原は、楚の国から追放されて『離騷』を作った。
左丘明は、盲目になったのち、国語を作った。
孫子は、足切りの刑を受け、『兵法』を編んだ。
呂不韋は、蜀の地に左遷されて、呂氏春秋を残した。

《これらの人々は、みな心に鬱結するものがあって、それを晴らす機会がえられず、それで過去の出来事を書き記すことによって、ありうべき未来を思い描いたものであります。》

そして、司馬遷は、

《・・この世に埋もれている、旧い言い伝えを残すところなくかき集め、おおよその事柄のなりゆきを調べ、その始終をまとめ、治乱興亡の道筋を考察し、上（かみ）は軒轅氏黄帝の昔から、下（しも）は現在にいたるまでを、十表、十二紀、八書、三十世家、七十列伝、すべて百三十篇を作りました。

これによって天と人間関係を究明し、古今の変化を理解し、一家言を成そうとしたのであります。》

友人の任安に送った手紙には、司馬遷が、一時は自殺を考えながらも、ただ『史記』の完成のためだけに生き長らえようという悲壮な決意が記されています。

この司馬遷の不屈の執念がなければ、『史記』が完成することはなかったことを、この任安への手紙を通して知り、改めて司馬遷と『史記』の凄さを思い知るのでした。

(*) 新釈漢文大系 35『文選(文章篇)』原田種成著・竹田晃著・小嶋明紀子編、明治書院、2007年刊

追伸

前号の冒頭で、上海高島屋が8月25日付で閉店するとの紹介したのですが、実は、閉店のわずか2日前、8月23日に、急遽、閉店を取り止めるとの告知がなされました。理由は、上海高島屋のある上海市長寧区と建物所有会社の理解を得られたため、ということでした。長寧区としては、今後この地区に、上海高島屋を中心としたショッピングモールを発展させる構想を持っていたため、建物所有会社と協議の上、向こう3年間の家賃を無料としたことで、上海高島屋の採算が成り立ったといえます。

利用者の一人としては、まずは一安心といった心境です。しかし、閉店を発表以降、初めてお店を訪れる中国人客が激増したため、最上階の飲食店街は週末ともなると行列になっています。行きつけだったとんかつ屋は、お昼時は30人待ちにまでなりました。

ただし、巨額の賃料を棒引きしてもらってようやく採算が取れるレベルは、厳しい状況には変わりありません。向こう3年間、大化けする姿をみてみたいと思っています。